

▼特典小説『ぶつかりおばさん エピソード・ゼロ』

正直、おしゃれは得意な方じゃない。会社でも「地味なのに体だけデカイおばさん」と陰口を叩かれていることは知っている。それでも、こんな私でもいいと……こんな私だからいいと言ってくれる人が現れると思っていた。王子様じゃなくて、そこらのおじさんでも良かった。それですら、私には高望みだった。それが分かっていてなお、私は大きめの顔を少しでも小さく見せるために、フェイスラインにシャドウを入れている。

結婚相談所でうまくやるのは、もう諦めている。こちらから願い下げだと思ような男からも交際を断られて、いくら何でも私のプライドが持たなかった。マッチングアプリで会った男とは、だいたい仕事上がりに会って、ご飯に行って、お酒を飲んで、そのままホテルに雪崩れ込んだ。きっとこの後ブロックされるんだろうなと分かっていて、それでも『オスに交尾してもらえるメス』である自分が捨てられなかった。名前も覚えていないチンポが 10 本を超えたくらいから、私は漠然と「穴に棒を突っ込ませるだけで気持ちよくなれるならお得か」なんて、婚活とはかけ離れた感情さえ抱き始めていた。

決まって、みんな言う。

「俺よりおっきい女と付き合うのはちょっとね」

私が大きいんじゃない。お前が小さすぎるんだ。

「ババアと付き合うのはちょっとね」

私がババアなんじゃない。お前がガキなんじゃないか。

「やるだけならいいんだけど」

お前がやってるんじゃない。腰を振ってるのはいつも私じゃないか。

安いチェーンのファミレス、そのレジ前で財布を出そうとした私を、青い車のアイコンの男が制した。たった 2000 円ちょっとのおごりだったけど、嬉しかった。初めて、お酒無しでこの男と楽しい『運動』ができるかと思った。

「じゃあ、今日はこれで」

車の男は、早足で人混みへと消えていった。向こうはホテル街だ。きっと風俗店だってある。

「何それ」

身の丈に合わないハンドバックのベルトをぎゅっと握りしめた。

私があなたよりも大きいから？

私があなたよりも年上だから？

やるだけの価値もないマンコだと見切られた？

内臓を焼き焦がすような、強烈な憎しみが沸き上がってきた。顔写真も載せていない男にごくわずかな希望を見出して、仕事を必死で切り上げて、駅のトイレでメイクを直した。その結果がこれだ。

男なんて、こっちから願い下げだ。でも……このムラついた気持ちは、一人では抑えきれ

る気がしなかった。

駅へと戻ると、私を素通りしていった年下のひ弱そうな男たちが何人も目に付いた。

そうだ。こいつらに選ばれるように頑張る必要なんてない。私がこいつらを選んでやればいいんだ。

歩きスマホをしていた会社員風の男にわざと正面から近付いて行って、思い切り肩をぶつけてやった。彼は簡単によろけて尻もちをつく。音を立ててスマホがホームに落ちる。

「おい、何ぶつかってきてんだよ。ザコオスのくせに生意気……ちょっとチンポ貸しなさい」

彼のネクタイの結び目をぎゅっと握りしめて持ち上げ、そのまま多目的トイレへと引きずっていく。一方的な、私の『運動』のために。慌てる男の声のおかげで、心の奥のもやもやが少しずつ晴れていく気がした。